

# 学力評価方法としての定期考査の再検討

—宝仙学園中学校における中間テスト廃止の実践を手がかりに—

助 川 晃 洋 ・ 坂 本 徳 雄

## I 研究の対象と課題

我が国の中学校では、生徒の学力を評価する際の主たる基準として、別言すれば、成績・通知表をつけるために、定期考査（＝定期試験、定期テスト）の点数が通常用いられる。中間考査（＝中間試験、中間テスト）で、国語、社会、数学、理科、英語（正確には外国語とすべきかもしれないが、実態の方を優先する）の主要5教科の試験を行い、期末考査（＝期末試験、期末テスト）で、それらに音楽、美術、保健体育、技術・家庭を加えた9教科を課すところが多い。実施時期としては、3学期制の場合であれば、1学期の中間は5月中・下旬、期末は6月下旬から7月上旬、2学期の中間は10月中旬、期末は11月下旬から12月上旬、3学期の期末（学年末）は2月中・下旬というのが一般的である。

この仕組みは、不文律として生まれたものの、すっかり定着している。定期考査については、各種法令・規則によって定められておらず、あくまでも慣例に過ぎない。しかし、だからこそ、その存在を疑い、異論を唱え、代案を提示することは、かえって難しいのではないか。「しない」という選択に至っては、「する」ときに慣れ、それを当然のごとく受け入れている大多数の関係者からすれば、どうにもあり得ない話であるに違いない。

ところが近年になって、定期考査の廃止に踏み切る二つの学校が、東京都内に現れた。千代田区立麴町中学校は、2015年度「から1学期の中間考査を廃止し、まず、年5回あった定期考査を年4回とし」、「続いて、美術の定期考査を廃止し、実技や成果物で評価をする形に切り替え、いよいよ「2018年度から、全学年で中間考査・期末考査を全廃し」ている<sup>(1)</sup>。その背景には、目的

と手段を取り違えない、最上位目標と指導の優先順位を忘れない、学校の当たり前を見直す（宿題や固定担任制、運動会のクラス対抗、服装・頭髪指導も廃止となった）、成績をある時点で確定させることに意味はない、という工藤勇一校長（2014年4月～現在に至る）の考えとリーダーシップがある。また宝仙学園中学校（中野区に所在する私立中高一貫校の中等部であり、正式名称は、後ろに共学部理数インターと続くが、そこは省略する）は、2019年度から中間テストを廃止している。

ただし両校いずれについても、上述した以上に、事の詳細が明らかになっている訳ではない。特に宝仙学園中学校の方は、麴町中学校の取り組みが、専門書や学術論文では扱われていないにせよ、それでもテレビ番組や一般書、新聞・雑誌記事において何度か、しかもかなりセンセーショナルに紹介されているのに対し<sup>(2)</sup>、全く俎上に載せられたことがない。その点で、研究対象としての新規性が、より一層認められる。また坂本は、宝仙学園中学校在職期間（2015年4月～2019年3月）中の2018年度に、副校長として関係の議論に加わる一方、調査者の立場を兼ねて、記録や資料の収集に努めてきた。2019年度に入ってから同校との交流を継続し、実践と研究をフォローしている。このように好条件が揃っていることを踏まえて、本研究では、宝仙学園中学校のケースに着目する。そして中学校における定期考査の存在意義について、事例に即して問い直すこと、具体的に言えば、一つのエピソードとして、かつて中学生の試験勉強のあり方が変わっていった経緯を確認した上で（Ⅱ）、現在に目を移し、宝仙学園中学校では、中間テストの廃止に向けて、どのような動きが見られたのか、中間テストをやめる代わりに、どのような評価手法が採用・実行されたのか、教師は、その成果や課題をどのように受けとめたのか、これらの問いに対する回答を提示することが（Ⅲ）、本研究の課題である。

なおⅠ、Ⅱ、Ⅳは助川が単独で執筆した。Ⅲは坂本が草稿を準備し（そこまでは至らないほどの情報提供を含む）、助川が改めた。全体の調整と仕上げは、何度かの協議を経て、最終的に助川の責

任で行った。

## Ⅱ 中学生の試験勉強の変化

藤澤伸介の『ごまかし勉強（上）』の第3章「中学生の家庭学習の変化」では、「70年代のテスト準備」と「90年代のテスト準備」について、それぞれ別々の節で論じられている。そこからは、両者の違いを明瞭に看取することができる。

まずは1970年代について。「当時のテスト準備法は、かなり個人差がありましたが、比較的成績が良かった人の準備法には共通点がありました」。

- ・ 試験範囲の教科書とノートを読み返し、必要ならば特別なノートやルーズリーフの中紙、レポート用紙に要点をまとめる。わからないことが見つかった場合は、詳しい学習参考書を読んで納得する。
- ・ 覚えなければならぬ用語や単語などを抜き出して、カードや一覧表といった暗記材料を作る。通学電車内では、それを持ち込んでいる中学生の姿がよく見られた。
- ・ 漢字や計算の記憶・練習作業は、新聞折り込み広告の裏紙や計算用紙、わら半紙を使って行う。それが一通り終了した後は、どこまで学習が十分であるかを確認するために、問題集を利用する。その際には、出版社が推奨する使い方を参考にし、弱点を発見したら補強し、再度、そして繰り返し同じ問題集で点検し直す。解答を直接書き込むことはせず、別紙に記入する。

これらが、「最も確実に望ましいテスト準備法」であると考えられていた。しかし多くの子どもたちは、例えば次のような苦勞を抱えていた。

- ① 重要点が何であるかが、なかなか見つけられない。
- ② 準備時間が足りなくなることがある。

それでも様々な障害を乗り越えて、適切な対策をすべて講じた者だけが、高得点を取ることができたし、仮にそうはならなくても、少しでも準備をすれば、意味がわかる喜びや体系が見えてくる楽しさを味わうことができた。

自分で頭を働かせて、うまく要点をつかんだり、定着の工夫をしたりしない限り、良い成績は収められませんでした。（中略）工夫をすればそれだけ達成度は上がりましたので、レベルに関わりなく意欲が高められる体勢になっていたと思われまゝ<sup>(3)</sup>。

次に1990年代について。「90年代のテスト準備が、70年代のテスト準備と決定的に異なる点は、試験の出題内容が事前にわかっているという点です」。

- ・ 定期テスト対策のCD-ROMが販売されている。教科書準拠になっているので、出題範囲がどこからどこまでか、ページ番号を指定するだけで、予想問題を何通りもプリントアウトすることができる。2000年の秋からは、インターネット上でも配信されている。CD-ROMが普及する前は、フロッピーディスクに入ったトレーニング教材を販売する会社があり、相当数の学習塾が、これを一括購入して、塾生に利用させていた。
- ・ ほとんどの種類の学習参考書が、定期試験で何が出題されやすいかを記述している。教科書準拠の問題集も、予想問題をたくさん掲載している。また書店では、暗記材料が売られている。テスト対策用の参考書には、要点の図解もあれば、暗記カードや一問一答式の暗記事項一覧表もついているので、整理や作成の手間を省くことができ、すぐに定着作業に入ることができる。
- ・ 学校の教師の中にも、どこが試験に出るかを教えたり、暗記材料や予想問題を配布したりする人が増えた。問題を事前に全部教えてしまう教師は、英語に多く、一部を教えてしまうのは、社会と理科に多い。

そして中学生の試験勉強は、有意味学習から機械的暗記になった。

試験に何が出るかわからずに困っている中学生は、今はほとんどいませんし、暗記材料を作るのに苦労している中学生もいなくなりましたが、その代償として、考えたり工夫したりする要素が試験準備から消え、試験準備が単なる作業にな

りました<sup>(4)</sup>。

以上の藤澤の指摘は、「私の観察にもとづいています」、「科学的な証明には支えられていません」と自ら述べていることから明らかのように<sup>(5)</sup>、客観性や妥当性、一般性の点で、確かに不十分である。しかしながら筆者は、これについて、あくまでも著者個人の主観の域にとどまるような、該当する範囲の狭い見解だとは、決して思わない。少なくとも1980年代に中学生だった助川と、1970年代には、もう中学校教師となっていた坂本にとっては（ともに埼玉県内公立で）、立場は違えども、それぞれが持つ過去の経験や記憶、実感に照らして、大筋で、揃って賛同することができる。1980年代以降、従来型の「解説参考書」（旺文社のシリーズであれば「ハイトップ」や「パーフェクト」）が売れなくなる一方で、「教科書ガイド」の売れ行きがますます好調になり、1990年代には「中間期末考査対策用の新しいタイプの学参」（同じく「わかりやすい」や「でるでる要点」）が登場し、程なくして「学参の主流」となったこともまた<sup>(6)</sup>、まさにその通りであろう。すなわち1970年代から1990年代にかけての時期に、中学生の学習観には変化が生じていたのであり、ということは、定期考査のあり方を疑問視する人もまた、教師と生徒の両方で、その頃すでに、少なからず存在していたものと推測される<sup>(7)</sup>。

### Ⅲ 宝仙学園中学校の取り組み

#### 1 事前段階<sup>(8)</sup>

宝仙学園中学校での中間テスト廃止論議は、2015年4月に、中高一貫校としての経営方針「21世紀型の進学校文化の創造」を実現するために、「理数インター＝知的で開放的な広場」というコンセプトを掲げて、「生徒主体の学びの導入」、「進路指導から進路支援へ」、「教科『理数インター』の展開」という三つの改革に着手したことをもって嚆矢とする。その後、先取り学習からゆっくり、じっくり学ぶスタイルへの転換、特に国語と数学、英語における生徒一人ひとりの理解度に応じたFollowの時間の創設、大学入試改革の動向に合致した「答えのない学び」の推進（2017

年4月の職員会議において、当時の進路支援部長は、「正解の学びの繰り返しでは、これからの大学受験には限界がある。これからは、正解のない学びが必要である。今、必要なことは、与えられた学びではない」と発言している）、面談週間のカンファレンスとコーチング、スタディレポート（学習記録帳）を軸としたサポート体制の充実、すべての子どもが「得意を活かせる」多様な入試区分の設定と、教員間における「多様な人材を多様な教育で育て上げる」という意識の共有、「多様なカリキュラムと多様な評価」の具現化を図る中で、「テストがあるから勉強する」という受け身の姿勢からの脱却と主体的・能動的な学習者の育成に向けた方策として、近い将来、中間テストを廃止することが、いわば規定路線となっていく。

そして2019年3月15日に開催された2018年度最後の教科部会では、「中間テストの廃止対策」を共通テーマとして、翌年度に向けた活発な話し合いが行われている。そこで出された主な意見は、以下の通りである（当日の議事録から一部抜粋）。

○ 国語部会

- ・ 新年度の評価方法として、定期試験を年3回（期末試験のみ）とする。
- ・ 行事の多い期間などは、ほとんど授業のないまま、中間試験に入っていた。中間試験を廃止することは、狭い試験範囲を短期間で学習すること、いわゆる一夜漬けから抜け出すことにつながる。その上で国語科として育成をめざす資質・能力について、「自分で目的・手段を考え、計画を立て、実行する力」ととらえる。
- ・ 従来の4科入試に加えて、新4科特別総合入試や公立一貫対応入試、リベラルアーツ入試、グローバル入試、AAA（世界標準）入試、英語AL入試、帰国生入試など、多様な生徒を受け入れている中で、これまでの定期試験だけでの評価から、多様な観点での評価に改める必要がある。
- ・ 平常点と定期試験の割合、定期試験の内容、平常点の材

料については、今後の検討課題とする。

- ・ 単元ごとの項目テストは、結局、一夜漬けを助長するのではないか。
- ・ 小テストや項目テストを導入することで、教員の負担が増すのではないか。

## ○ 数学部会

- ・ 小テストの仕組みをしっかりと作らなければ、教員が大変になる。再試も行う。
- ・ 定期試験と小テストを半々の割合で評価する。
- ・ 定期試験は、応用問題を中心として出題するとよいのではないか。
- ・ 試験時間を60分に延長したい。
- ・ 学習に意欲的でない生徒に対する配慮が必要である。観点別評価は、きちんとつける方がよい。また担当者間のコミュニケーションを密にしなければならない。

## ○ 理科部会

- ・ 評価の割合として、テストの得点7割、平常点3割（提出物2割、出席1割）と考えている。
- ・ 中間考査があることによるバタバタ感が解消され、授業時間数を確保することができる。受験のために、たった一度のテストで評価が決まってしまうことの怖さもなくなる。
- ・ 中間考査をなくして学習習慣が身につくのか。期末の試験範囲が広がることになるが、それで知識の積み重ねはできるのか。心配である。逆に日々の頑張りや努力が大切になってくるので、学習習慣が定着するかもしれない。
- ・ 多様な生徒に対応した平常点を考えなければならない。また担当者に裁量を認めることが重要であるが、公平性を欠く平常点となっては、生徒と保護者に説明ができない。
- ・ 学習習慣の定着や確かな学力の育成という点では、頻繁

に小テストをするのがよいが、どのように実施するか。毎時間か、それとも回数は減るが終礼時か。問題漏洩はどうしたら防げるか。採点后に、生徒からの自己申告による再チャレンジ制を取り入れてはどうか。そこで丸をもらえれば、その点数を採用する。

- ・ 定期考査の点数に、小テストの点数を混ぜるかどうか。赤点のラインをどこで引くか。理科実験レポートをどのように扱うか。いずれについても、慎重な検討を要する。

## 2 振り返りと展望

2019年度1学期の終了を目前に控えた7月5日に、坂本が宝仙学園中学校を訪問し、教頭の塩沢潔先生に対して、中間テストを廃止したにかかわる諸状況について、直接にインタビューを行った（校長の富士晴英先生も同席。音声及び筆記のデータあり。なお学期途中の5月16日には、英語科担当教諭1名に対して、経過の把握を意図した予備調査を行っている）。聞き取りの結果は、下掲の通りである。なお主な質問項目としては、次の三つを用意していたのであるが、実際のやりとりは、それらを一括する形で行われた。ただし、すべての事項に対して十分な回答が得られたかどうかについては、やや心許ない。

- ・ 1学期において、生徒の学力を見取るために、新たにどのような手段が講じられ、また評価行為・プロセスが、どのような順序、或いは流れで進められたのか。
- ・ 1学期中の様子を見る限り、各教科の指導や期末テストのあり方、授業での生徒の学びに向かう姿勢や習熟度、家庭学習の状況などには、どのような影響があったのか。
- ・ 1学期の反省を踏まえ、2学期、さらには次年度（以降）に向けて、どのような点を改善・充実していくべきであると考えているか。

- ・ 中間テストに代わる新たな取り組みとして、「小テストよりも大きいテスト」というイメージで、単元別テストを



実施した。しかし日々の授業から、学期ごとの成績評価を経て、学年の評定が決まるまでの流れを生徒に事前に示していなかったため、ただ中間テストをやめただけに終わってしまい、その意図を十分に浸透させることはできなかった。通常時間割通りの授業や各種行事、部活動が続いている中で単元別テストを行っても、期末テストの場合のように、その前から期間中にかけて、2週間近く勉強に集中させる従来のやり方と比べると、生徒のテストに向かう気持ちやモチベーション、意識が高まらず、準備の仕方や姿勢（昼休みの過ごし方や家庭学習の計画立案、特別補習への参加など）、テストの結果には、どの学年でも物足りなさを感じた。それでも上位の生徒は、何が変わっても、しっかりと対応して高得点を獲得している。中間や下位の層にとって学習効果が上がるような手立てを考える必要がある。

- ・ 小テストにプラスして、単元別テストで学力の定着度が満足のいくものではなかった生徒に対しては、合格するまで再テストを繰り返すので、生徒の負担はもちろん、教員の業務が増えたとし、その状況を「煩雑」と表現する者もいた。また中学生、特に1年生には、1学期の中間テストを設ける方がよいという意見が出た。小学校との違いを学ばせる絶好の機会であり、中学校3年間の定期テストにどのように取り組めばよいのか、全体を見通して学習計画を立てたり、家庭学習の習慣化を図ったりするきっかけにもなるのではないかと。中学生には、自律よりも他律が必要ではないか。一方で、自立した学習者を育てるという観点から、また高校教育や、その先の大学受験、進路選択につなげるために、テストによって学習習慣を身につけさせるというやり方に反対する教員もいる。
- ・ 学校行事、特に合唱コンクールの側から考えると、継続的に、集中して取り組めたという点で、中間テストはない方がよかった。いままでだと、約2週間、練習や活動がストップしていた。今回の合唱コンクールは、質の高いもの

になったと思う。

- ・ 管理職としては、現場の声、先生方の考えを聞くよい機会となった。当たり前に行っていた中間テストであるが、「しなくてもいいんだ」、「考え直していいんだ」という雰囲気が出てきた点は大きい。定期テストとは何を評価するためのものなのか、中間テストの意味とは何か、ただテストのためだけに勉強するというスタイルや、一夜漬けからの脱却をどのようにして促すかなど、改めて考え直す契機になった。
- ・ 2学期以降のことは、教科部会や学年会で1学期の総括を行った後、学年主任や各部（会）長をはじめとして、全教員で話し合い、方針を決定するつもりである。やってみたらわかったということもたくさんあるので、今年度の2学期は、昨年度とは違うものになると思う。

#### Ⅳ 研究のまとめと今後の課題

Iで設定した「課題」に沿って、ということは、行論に従って、これまでの考察で得られた知見（＝ⅡとⅢの要点）を整理するならば、それは、次の二点になる。

- （1） 1970年代と1990年代とでは、中学生の家庭学習、とりわけ試験勉強のあり方が大きく異なっている。その要因としては、定期テストが、簡単な学習作業だけで解くことができる問題ばかりになり、生徒にとっては、プレッシャーも少なく、ただ乗り切りさえすればよいものになったことが挙げられる。
- （2） 宝仙学園中学校は、2015年度以降、学校を学習者を中心に据えたアクティブな学びの場に変えることをめざして、様々な改革を進めており、その一環として、2019年度には中間テストを廃止し、単元別テストを導入している。しかし1学期だけでも、趣旨が徹底しておらず、環境が整っていないなど、いくつかの混乱が生じ

ており、解決が急務となっている。

そしてⅡでは、歴史的な変遷を先行研究に依拠して、Ⅲでは、今日における突出した現場の実情を（いわば）実証的にとらえた本研究全体を通じて、中学校の定期考査が、実は必ずしも盤石ではなく、むしろ揺らぎの中にあり、軽微な修正から始まって、例えば試験科目（数）やテスト形式、出題傾向の変更を経て、最後は完全に取りやめる場合に至るまで、いつ、どこで、どれほどの、どういった見直しを迫られてもおかしくないことが示唆された。

事実、2016年12月21日に出された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（＝中教審答申）では、次のように述べられている<sup>(9)</sup>。

資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。さらには、総括的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えられる。

さらに2017年3月31日に改訂・告示された中学校学習指導要領では、第1章「総則」の中に、第3「教育課程の実施と学習評価」という節が新設されて、「学習評価の充実」に当たっての配慮事項が列挙されている<sup>(10)</sup>。今後の中学校における学力評価の仕方、中でも定期考査の有り様や位置づけが、一体どのように変わっていくのか。引き続き宝仙学園中学校を中心としつつ<sup>(11)</sup>、他校の改革動向も視野に入れながら、検討を重ねていきたい。

注

- (1) 工藤勇一 『学校の「当たり前」をやめた。 生徒も教師も変わる！公立名門中学校長の改革』 時事通信社 2018年 p.27.

麴町中学校が「公立」でありながら「名門」と称されるのは、校区の特殊性や施設・設備の素晴らしさもさることながら、次のような事情による部分が多い。

当時（1950年代後半—引用者注）は東京で、番町小学校—麴町中学校—日比谷高校のコースをたどって東京大学へ進むという「日本のエリート」が世に知られるようになっていた。そのため番町小学校や麴町中学校へ学区外から越境通学する子どもも多く、問題となっていた。

木村元 『学校の戦後史』 岩波書店 2015年 p.97.

- (2) 「NHKニュース おはよう日本（“学校の当たり前”を見直す 公立中学の挑戦）」 NHK総合 2018年7月20日

「林先生の初耳学SP（林先生が今一番会いたい教育者と対談）」 MBS／TBS 2019年4月14日

「ニュースウオッチ9（“学校の当たり前”を見直す）」

NHK総合 2019年5月9日

多田慎介 『「目的思考」で学びが変わる 千代田区立麴町中学校長・工藤勇一の挑戦』 ウェッジ 2019年

「『担任固定・定期テスト・宿題』を廃止…公立中学発の大胆な教育改革、全国から注目」 2019年5月5日付読売新聞オンライン

「自ら学ぶ子どもの育て方」、「宿題、定期テスト廃止 自律促す麴町中の取り組み」『朝日新聞EduA』創刊号（vol.01） 2019年5月12日 pp.1-2.

「すぐ人のせいにする大人をつくらないために 名門・麴町中学校長の挑戦：宿題なし、担任なし、中間テストなし」『週刊現代』61巻3号（通巻2973号） 講談社 2019年2月2日 pp.50-52.

- (3) 藤澤伸介 『ごまかし勉強（上） 学力低下を助長するシステム』 新曜社 2002年 pp.64-67.
- (4) 同上 pp.78-79.
- (5) 同上 pp.61-62.
- (6) 同上 p.120.及びpp.126-129.
- (7) 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄編 『小数ができない大学生 国公立大学も学力崩壊』 東洋経済新報社 2000年  
梶田正巳 『授業を支える学習指導論 PLATT』 金子書房 1986年  
西林克彦 『間違いだらけの学習論 なぜ勉強が身につかないか』 新曜社 1994年  
藤澤伸介 『ごまかし勉強（下） ほんものの学力を求めて』 新曜社 2002年
- (8) 本節の論述は、宝仙学園中学校のHP (<https://www.hosen.ed.jp/jhs/>、2019年4～5月に閲覧)と、坂本が作成した「宝仙学園中学・高等学校の『主体的な学習力』育成にかかわる実践」、「共学部中学・高等学校教科部会に見る定期テスト見直し論議」という二つの私家文書（いずれも2019年4月27日付、もちろん未刊）に依拠している。
- (9) 文部科学省教育課程課・幼児教育課編 『別冊初等教育資料』 2月号臨時増刊（通巻950号） 東洋館出版社 2017年2月 p.75.
- (10) 文部科学省 『中学校学習指導要領（平成29年告示）』 東山書房 2018年 p.24.  
文部科学省 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』 東山書房 2018年 pp.91-94.参照  
p.93.では、中教審答申と全く同じく、「ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である」と述べられている。
- (11) 宝仙学園高等学校女子部の教育評価改革については、次の拙稿において報告済みである。  
助川晃洋・坂本徳雄 「高校教育における学習評価の充

実志向－eポートフォリオの導入・活用と多面的評価の  
推進－」『教育学論叢』第36号 国士舘大学教育学会  
2019年2月 pp.91-105.